

解深密經成立構造の研究

西尾 京雄

目次

本 序 論

第一章 解深密經の宗について

第二章 序分の成立構造

第一節 佛徳圓滿の文の據處

第二節 住處圓滿の文の源流

第三節 聲聞徳圓滿の文の所依

第四節 菩薩徳圓滿の文の所依

第五節 序分の成立構造について

第三章 正宗分の成立構造

第一節 勝義諦相品の構造について

第二項 勝義四品開顯の契機

第三項 不可言無二品の構想

第四項 超過尋思品の構想

第五項 超過一異品の構想

第六項 一切一味品の構想

第七項 心意識相品の構想について

結 論

- 第三節 一切法相品の構想
- 第四節 無自性相品の構想
- 第五節 分別瑜伽品の構想
- 第六節 地波羅蜜多品の構想
- 第七節 如來成所作事品の構想

序 論

印度に興隆せる瑜伽唯識教學が支那に流傳して地論・攝論・法相等の三學派を形成し、その中玄奘所傳の法相學派のみ日本に傳承せられ、今日法相宗として宗脈を保持してゐるのである。その玄奘の傳持せる唯識教學を護法正義として統攝し唯識法相宗の基礎を樹立した人は慈恩大師基であつた。彼はその著成唯識論述記の中に、所依の經として、華嚴・深密・如來出現功德莊嚴・阿毘達磨・楞伽・厚嚴等の六經を數へてゐるが、就中、解深密

經を以て根本正依としてゐるのである。本經が根本正依として瑜伽唯識教學上に於て重要なる地位を堅持してゐることは彌勒說瑜伽師地論攝決擇分菩薩地の下に七十五卷より七十八卷に亘りて殆んどその大部分を引用し、以て自己の所說となして居ることによつても知ることが出来る。又、無着の攝大乘論の所知依分第二^②には、心意識相品の有名なる頌

阿陀那識甚深細 一切種子如瀑流
我於凡愚不開演 恐彼分別執爲我

が引用せられて阿頼耶識の存在を論證する教證とせられ、所知相分第三^③には分別瑜伽品の影像門の唯識を説く經文が引用せられて唯識義の教證としてゐる。前者の頌は顯揚聖教論卷一^④にも亦引用し阿頼耶識存在の教證となつてゐるものである。

更に世親の教學に於ても亦よく此等の經論を踏襲して體系組織し、それはやがて十大論師の學說として開展したのであつた。

かくの如く瑜伽唯識教學に於ける解深密經の位置は甚だ主要なるものであることを知るのであるが、最近の研

究に於て、中觀派よりは解深密經を聖教としてしかく重要性を與へてゐないもの、如く報じてゐる。それは清辨の主著である中觀心論疏思擇焰に於てである。その思擇焰の第五、瑜伽行の眞實を決擇することに入る章は、中觀の svāntarika 派より瑜伽唯識教學を論破するものであり、その論破の前に綱領が擧げられてゐる。その瑜伽行派の所說の聖教量として、六個の聖教が引用せられてゐるが、其等の聖教は解深密經の其ではない。それについて山口教授は「今、清辨所對の瑜伽唯識派が引用提出するものとして掲げられたその聖教は、瑜伽唯識說の聖量となるものであるから、支那所傳の唯識法相宗の傳承から云つても、また西藏の傳承から云つても、それが解深密經の諸文であつて爾るべきであるが、その用語の二三について吟味する所によれば、それは且らく解深密經中に見出されざるが如くである。尙又これらの聖教は般若波羅蜜の方軌道理であると云はれてゐるのであるから、それらは寧ろ般若經の文言であるとするのが自然であらう。併し般若經と云つても、それは、オバーミラー (Obermiller) が西藏の傳承によつて言ふ所の「彌勒の詰

問 (Byams pas shus-pahi lehu) と名くる一章が添加せられて瑜伽唯識派の依用の聖典となつた二萬五千頌般若 (pañcaviṅśatisaṣṭakaprajñāparamitā) の文ではないであらうか。」と言つて居られる。

かくの如く解深密經は瑜伽唯識學派に於て根本證權として尊重せられるに對して、中觀學派によつて提示せられる瑜伽唯識教學綱要に於て聖教量とせられない跡の見られるのは如何なる理由によるのであらうか。それは本經の成立構造を知ることによつて、かゝる事情の一端を知り得る契機ともなるのでないであらうか。

扱て、解深密經の成立に關し、その構造の系統について、初めて論述したのは、故佐々木月樵教授の攝大乘論の研究に於てあるやうである。そこには、解深密經の第一部として、序品と勝義諦とを攝め、その勝義諦四品の活躍する人格が曇無竭菩薩と須菩提であること、第二部として、心意識相品以下如來成所作事品を收め、ここに活躍する人格が、(1)廣慧、(2)功德林、(3)成就第一義、(4)彌勒、(5)觀世音、(6)文殊師利等の菩薩であることを指示し、以て第一部は般若經の對告衆であり、第二部は華

嚴經天上部の切利天宮(廣慧)、夜摩天宮(功德林・成就第一義)、兜率天(彌勒)、他化自在天宮(觀世音)等の四會の對告衆であることを指摘し、更に教義に徴して、解深密經は兩經の經系を繼承すると同時に、その縮約であると道破せられてゐる。この考察の傾向については既にある學者によりても容認せられてゐるが、このことは、佛敎經典史を取り扱ふ他の學者による本經の思想的位置を語るについても亦、大體同じ意趣にあるやうである。即ち「唯識教學は其の起點を般若經系の實相教學の大成と般若三昧經・十地經系の唯心教學の成立した所に置くのである。即ち、實相論と唯心論の兩大系の完成し成立した所に置くものである、それであるから唯識教學の起點としての經典解深密經は、その經典の中心を相並ぶ三品、心意識相品と一切法相品と無自性相品及びその後に續く分別瑜伽品に置くものであると見ることは決して妥當を缺くものでない。」と述べてゐる。

此等の所論は適正なる洞察であると思はれるが、解深密經の諸品について一々素材の上より證明を經てゐるのではないから、こゝでは、出来るだけその成立構造を文

相の上より研尋、究明して根本性格を明かならしめようと
とするものである。

尙、今後の論述が専ら藏傳の資糧を基本として進められるのであるが、それが本經の經意開發の理趣に沿ふ所以である一例を提出し、以て識者をして藏傳の依るべきものあることを知らしめる方便としよう。

分別瑜伽品の失はざらしめんが爲に假を決擇する第九に、義を知るについて四種を説いてゐる。第三は一切の心觀察義 (sens la brtagpahi don, cittaparikāra) を攝することを説いてゐるが、經文は左の如くである。

善男子、彼諸菩薩由能了知四種義一名爲知義、何等四義。一者心執受義、二者領納義、三者了別義、四者雜染清淨。善男子、如是四義當知普攝一切諸義。

この四義を解釋するについて、測疏には二釋を擧げてゐる。

一云、心執受義者、謂知自心於境執受、領納義者如彼三受納之義、了別義者謂知諸識了別境義、雜染清淨義者知一切法雜染淨。

一云、此四如其次第知四念處所緣四境、謂身受心

法、而言心執受者舉能執受顯所執身。

この第一説は解深密經に限らずすべての經論に相應する解釋であつて語義を解釋したものに過ぎないものであり、第二説は身・受・心・法の四念住を所觀と爲したものと解し、その心執受義のみを擧示するに止めてゐる。

講讀にては、

此四法取上能遍知中四念住以爲所說一身受心法無始

世來顛倒本故、廣如諸論、四念住如雜集十。

とあつて、測疏の第二説を受け、その詳細は大乗阿毘達磨雜集論卷一〇(大正・三一・七三下)に譲つてゐるがそこには四念住を所緣・自體・助伴・修習・修果の五門によつて分別し、その説相は通佛敎のそれと基調をひとしてゐる。

此等の解釋を以て、解深密經に於ける四念住觀とするならば、阿頼耶識の雜染と清淨とを説くを以て宗となす所説と如何に關聯するのであらうか。その釋義は本經の根本宗義より遊離し、思想域面の埒外に置かれてゐる感

を深くするものである。之に對して藏傳の資料は如何に解釋するかを見る爲

に解説のそれを和譯・引用することゝしよう。

一、一切の心觀察義を攝すとは、心因觀察・心領納觀察、心了別觀察、心雜染清淨觀察にして、次第の如く一切の身・受・心・法〔等〕の念住の義を攝するものなり。

二、第一心因觀察とは、心執受の義 (cittadana-artha) なりと説くものにして、實に阿頼耶識は〔結生〕相續の二因、即ち、徧計の自性に執着する習氣と有所依の色根の執受なり。實に、これによつて一切の身念住の義を攝すと説くものなり。

第二心領納觀察とは、領納の義 (anubhavārtha) なりと説くものにして、我なりと了別して三種の受の領納なり。實に、これによつて一切の受念住の義を攝すと説くものなり。

第三心了別觀察とは、了別の義 (vijāpyārtha) なりと説くものにして、所緣 (dmg-s-pa, ālamāna) は〔相〕識 (nam-par-ig-pa, vijāpti) 〔として〕顯現せるもの〔よ〕して、唯心 (cittamātra) なりと知るなり。

實に、これによつて一切の心念住の義を攝すと説くも

のなり。

第四雜染清淨觀察とは、雜染と清淨との義 (samkleśa vyavadānārtha) なりと説くものにして、實に、かの〔唯〕心そのものゝ心心所等の所依 (gras, āśraya) と所緣との相 (man-pa, akāra) を不覺と覺と〔の門〕よりして雜染と清淨となるなり。實に、これによつて一切の法念住の義を攝すと説くものなり。^①

右の解釋は極めてよく解深密經の當相と相應するものであり、この解明に於てこそ四念住觀が解深密經を奉ずる瑜伽行者の四念住觀となり得るであらう。かくして、この四念住觀によつて一切の義が攝せられると説く教説が意義あるのである。

以上説く所によりて知られるが如く、圓測を初めとする解深密經の解釋は本來の經意を盡してゐることは言ひ難いものがあるやうである。現今に於ても亦、此等の解義を基としてゐるのであるから、經典の成立構造について或は經典の解釋について、これらと類する解明の幾多あることを觀取するのである。

註① 成唯識論述記卷一(大正・四三・二二九下)

- ② 玄奘譯攝大乘論卷上(大正・三一・一三三中)
- ③ 同右 卷中(大正・三一・一三八中)
- ④ 顯揚聖教論卷一(大正・三一・四八〇下)
- ⑤ 山口益著、無と有との對論、一五〇頁
- ⑥ 宮本正尊、根本分別の研究、佛教論叢四一四頁
- ⑦ 赤沼智善著、佛教々理之研究七〇頁
- ⑧ 解深密經卷三(大正・一六・七〇〇中)
- ⑨ 解深密經疏、續藏・三四・五・四四七左
- ⑩ 解深密經講讀(日本大藏經方等部章疏六一九九上)
- ⑪ 解說一二五函、二二一表裏

本論

第一章 解深密經の宗について

佛教の經典は「佛陀と成る教へ」であるといはれるが、^①かくの如く、「佛陀と成る教へ」が説かれるのは、現法に、佛陀即ち覺證・覺悟せる人があつてこそ初めてそこに「佛陀と成る教へ」が説かれるのである。随つて、そこに説かれてゐる教説は覺證せる經驗的事實そのものであるのであつて、それはその人にとつて絶対的權證であり自ら内證なるものである。その内證が世間に行布せられる爲には言證による方便施設がなくてはならない。方便成立

せられた經典は遠く時代と場所とを距て、居る我々にとりては、時には師資相承の絶えるあつてその經典の文言が覺證の線に沿つて統一的・有機的に理解されないものもあるであらう。然し、其等の經典の一語といへども覺證の經驗的事實に關聯してゐる大悲廻向の言證なのであるから、相承の失へることより意義の明かならざることあるも、善く時代文化の爽雜性を見究めて、その意義に直參し、達解せられねばならない。この宗教的體驗を重んずるよりして佛教の經典は「佛陀と成る教へ」といふよりも「佛陀と成れる教へ」と言ふことが適切でなからうか。

今、本經の覺證の事實は何を宗として統一せられ分品施設せられてゐるのであらうか。徳龍は本經の宗を次の如く説いてゐる。

今斯宗、正宗七品從、其所明、勝義諦相、離言眞如爲、宗、心意識相品、唯識爲、宗、一切法相品、三性爲、宗、無自性相品、三無性爲、宗、分別瑜伽品、止觀爲、宗、後二品、菩提因果爲、宗、八品合論決、擇一代諸教、顯、中道了義、境行果、爲、宗也

この解釋に於て、第一は各品に宗を見る所に特徴があるのであらうが、一經の宗を散漫ならしめるやうであり第二は八品を合論してゐるのであるが、本經諸品の品類次第の意義と相應せしめて説示するものであり、總じて體系的でない憾があるやうである。

余は、今、本經を通貫する思想は阿頼耶識思想であることを知るのであるから、本經は阿頼耶識の雜染と清淨との相を明すを以て宗と爲すと説くであらう。

本經の分品次第の意義については、境・行・果として説かれてゐると見ることが相承の義であるといはれてゐるが、藏傳に於ては、附録科判に見るが如く、二諦を施設するものであるとしてゐる。即ち、勝義諦の教説として四相、世俗諦の教説として六相を説示するのである。而して此等の二諦の教説によつて二なる事物 (*dhos-po, vastu*) があることを説くのではなく、一なる事物即ち一心、阿頼耶識を異門 (*pariyāya*) によりて二種の相として假説するのである。勝義諦の不可言無二品等の教説は般若經に於ける勝義諦の表顯である不可思議等の句の廣釋であるのであるが、世俗諦の教説を引發するに當つて、

瑜伽觀行者が創唱せる一切種子心識 (*sarvajñakacita*) 等を心意識相品に於て顯説するが爲に、勝義諦の教説と世俗諦の教説とが關聯なく、寄木細工的結合の如く見られるのである。然し、勝義諦説の第一品不可言無二に於ては、一切種子心識なる阿頼耶識をば、事 (*vastu*) として隱説せられ、伏線的説示となつてゐる。この事が阿頼耶識をいふものであることは瑜伽品に於ける四種所縁の中、第三事邊際 (*vastvanta*) 所縁の事とは阿頼耶識をいふものであることを知ることによつても隨知せられるのである。勝義諦説はこの阿頼耶識の盡所有性 (*yadvatā*) と如所有性 (*yadvatā*) との境界の不可思議なる相を四相を以て分別し、施設してゐるものである。

勝義諦説は覺證の事實である根本無分別智の涅槃智の位態に於ける教説であつたが、世俗諦説は法住智の位態に於ける教説であるのである。

この世俗諦の教説として第一心意識相品に於て、不可思議なる事を法住の面に於て阿頼耶識として顯了に説くのである。法住の位態に説かば、その施設の如く有を執ずることが衆生の習慣性であるから、それを遮遣する爲

に涅槃智へ歸趣することが説かれる。かゝる説き方は般若經のそれであり、諸佛説法の常規なのである。

一切法相品及び無自性相品は、これ等の心識が如何なる相狀を顯現するものであるかを有と無との二性の面より説くもの、分別瑜伽品は其等の様態を觀する方法を示し、地波羅蜜多品と如來成所作事品とは、所依なる阿頼耶識の相縛と羴重縛とを轉捨しつゝ、菩提を得る因及び轉依成滿なる果とを開顯してゐるのである。

翻つて、序品に於てはかゝる勝義と世俗との二諦を説き給ふ佛陀説法の會座を説くのである。その佛陀の徳相について無着疏によれば二種の解釋を擧げる。その第一釋は自他二利圓滿を説く。最清淨覺等と説く覺證は諸法なる阿頼耶識の盡所有性と如所有性との覺慧であり、無上の智果と斷果とを得る自利圓滿を顯はし、その身を一切世界に流布する等の經句は智斷二果による他利圓滿を示すのである。十八圓淨の淨土は智斷二果が淨識相として顯現せる相であり、十三徳を具する聲聞と十徳を有する菩薩とはかゝる佛陀の教法を聽くに應しい聽衆である。

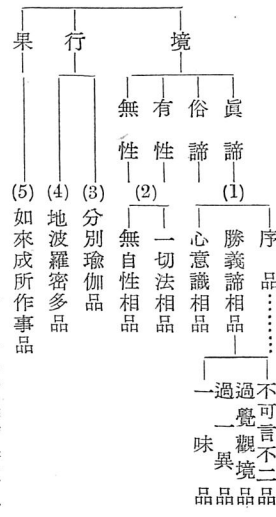
かくの如く、一經の諸品を通觀することによつて、本經は阿頼耶識の雜染と清淨との相を説くを以て宗と爲すといふことが出来るであらう。

註① 山田龍城、印度佛敎史に於ける大乘佛敎、佛敎研究、第五卷第五・六號

②

玄奘譯

眞諦譯



③

百論、卷下、諸佛説法、常依俗諦・第一義諦・是二・皆非妄語也(大正・三〇・一八二下)、智度論・卷三八(大正・二五・三三六中)參照、

第二章 序分の成立構造

第一節 佛徳圓滿の文の據處

解深密經は正宗分に於て勝義諦の敎説と世俗諦の敎説

との二法門が開演されてゐるのであるが、序分に於ては、かゝる深密法門が説かれる會座の光景が説かれてゐる。

その説處は十八圓淨の土といはるゝ普光佛地であり、説主である佛は二十一徳を具するのである。

聽衆は無量無數であるが、その中、聲聞衆はすべて十三徳を具し、已に如來の聖教を奉行する大聲聞、菩薩衆はみな十徳を備へ、解甚深義密意菩薩等を上首とする摩訶薩である。

今、これより序品に説かれる其等の經句が構想・成立せられるについて、前代に興隆せる如何なる經典が素材となり所依となつてゐるかを検討・究明しようと思ふのであるが、先づ、顯著に指示し得るものより初めよう。

故佐々木教授は各品の問者となる菩薩名により、その品の據れる經を想定した先例に倣つて想起することは、

佛地 (Buddha bhūmi) は解説によれば、普光明 (kūn-tu-hōd) 地といはれるといふことである。楠博士編、翻譯名義大集、第二百二番には、その普光明佛地の梵語を *samanta-prabha-buddhahimi* (*saṃs-ryas kyī sa kūn-tu-hōd*) としてゐる。この普光明地といふ名より、華嚴

經の説處に普光法堂 (*pho-bran hod kūn-nas hbyur-ba*) の名あるを連想する。華嚴經の説處は古來より七處八會の説法^①とせられるが、その中、寂滅道場なる普光法堂とは、正しく普光佛地を寄顯するものであつて、佛地を説く解深密經序品と關聯があるのでなからうかの推測である。かくして、第二會名號品及び第七會離世間品等の序品を見る。初めに佛が普光法堂に在りて蓮華藏寶師子座に坐したまふと言ふについて、この寶座は解深密經の佛の住所を以て大寶華王衆の建立する大宮殿とするそれと同じものに相違ない。

次に、佛の徳が如來名號品には十句により、離世間品には二十一句によつて説かれてゐるが、其等の經句は解深密經の薄伽梵の徳を説く二十一徳のそれと殆んど全く相應することを發見するのである。

此が解深密經序品佛四十一徳の經文を華嚴經離世間品の佛徳の經句と對應せしめ得た經過であるが、このことについて、余の寡聞のためか現在の學界に於て、解深密經成立に關する研究の上に説き及んだものゝあるを聞かなかつたのである。華嚴經研究の上に於て、探玄記等は

其等の經文について、既に、「佛地經及解深密經辨二十八圓滿受用土」中、歎受用身有_二此二十一種功德_一」と言ひ正しく解深密經の經句を當てゝゐる。

此等の佛の二十一徳を釋するについて五釋を數へるが無着の解深密經疏の釋が本經の原初の意義に親しいと考へるから、その第一釋に據つて一々の句を對配し解釋することゝしよう。

第一徳、無上智 (ye-ces bla-na-med-pa) 解深密經では最清淨覺 (gin-tu-nnam-par-dag-pahi blo dan ldan-pa, svicuddhabuddhi) として、佛馱跋陀羅譯六十華嚴離世間品では成等正覺 (gin-tu-nnam-par sabs-rgyas-pahi dge ons-pa) として少異するが名號品では善覺智 (Blo gin-tu nnam-par-dag-pa) とあつて藏譯より見るも解深密經の經句と同一であることを知ることが出来る。覺證の根本慧によつて盡所有性 (yāvatta) を悟り、雜染無きより清淨覺と稱するのである。解深密經に於ては盡所有性の語は如所有性 (yathavatta) と對して用ひられ、前者はあらゆるものゝ義であつて五蘊等を意味し、後者はその如性をいふもので、般若經では空・實際と同義に用ひられ無

來無去と釋するが解深密經では七眞如の内容を與へてゐる。その無上智を示す清淨覺が標句であつて、更に次の四句によつて轉釋されるのである。

第二徳、善覺慧 (lags-par-things-su-chud-pahi blo rid) 解深密經では不二現行 (kun-tu-spyod-pa gnis mi mñah-ba, advayasamudācāra) に對して離世間品では念不二念 (mñah-ba mi gnis-pa la yan-dag-par-spyod-pa) として、名號品では無_二一念 (mi gnis-pas yan-dag-par-spyod-pa) として共に語譯の相違である。内外十二處の相が現行せむる義である。

第三徳深義 (don zal-mo) 覺慧、解深密經では趣_二無相法 (mtshan-ñid med-pahi chos la mchog-tu-gshol-bar-ndsad-pa, alakṣya-jadharmaparāyaṇa) として、離世間品では無相念 (mtshan-ñid med-pahi chos la rab-tu-rten-pa) として、名號品では_二達法性 (chos mtshan-ñid med-pa la gin-tu-gshol-ba) として、其等の漢譯に於て少異するが如くであるが、藏譯より同一であることを知る。法無我の甚深義を覺る義である。

第四徳無垢 (dri-na-med-pa) 覺慧、解深密經では住

於佛住 (saiṣ-rygas kyi gnas-pas gnas-pa, buddha-vihā-
reṇa viharan) に對つて、離世間品及び名號品は共に住
佛所住として同一譯句である。この第四徳は藏譯離世
間品・名號品には脱落してゐるやうである。菩薩の住處
より超過する義である。

第五徳無上 (Bla-na med-pa) 覺慧、解深密經では速
得一切佛平等法 (saiṣ-rygas thams-cad dai mñam-pa
nid brñes-pa, sarvabuddhasamatā-prāpta) に對つて、離世
間品では等一切佛 (raiṣ-rygas thams-cad dai mñam-pa
nid brñes-pa) とし、名號品では等諸如來 (saiṣ-rygas
kyi nam-par-spyod-pas saiṣ-rygas thams-cad dai mñam-
pa-nid brñes-pa) ともつて藏譯を比較するものとすべし
その等なることを知る。一切の佛の差別無き義であ
る。

以上の五徳が第一分であつて、無上の智果による自利
圓滿を彰はすものである。

第六徳無上斷果、解深密經では到無障處 (sgrib-pa
med-pahi rtogs-par thugs-su-chud-pa, anāvāra-gaṅg
gata) に對つて、離世間品では到無礙趣 (sgrib-pa

med-pa thugs-su-chud-par-rtog-pa) とし、名號品では至
無礙趣 (dsgribs-pa med-pas rtogs-pa thugs-su-chud-pa)
として全く同一である。盡所有性を覺する義である。
この無障處に到る斷果の一標句が以下の三釋句として
隨轉するのである。

第七徳無煩惱障覺 (non-moñs-pahi sgrib-pa ni mñah-
las rtogs-pa) の徳は第二句が含まれ、第一句は解深
密經では不可轉法 (phyir-mi-dog-pahi chos dai ldan-pa,
apratyudāvarṭyadharmā) に對つて、離世間品では得不遺
法 (phyir-mi-dog-pahi chos dai ldan-pa) とし、名號品で
は具不退法 (phyir-mi-dog-pahi chos-can) とつて譯語
の相違のみである。

第二句は解深密經では所行無礙 (gpyod-yul gyis mi
hphrogs-pa, asaṅghāryagocara) に對つて、離世間品では無
礙境界、名號品では無壞境界とするが、藏譯は共に spy
od-yul la hphrogs-pa med-pa と譯してゐる。

前句は未來に煩惱障を斷じ滅すること、後句は現在煩
惱の生じない義である。

第八徳無異熟障覺 (nam-par-smin-pahi sgrib-pa mi

mpah-la) 解深密經では其所に安立不可思議 (nam-par-gshag-pa bsam-gyis-mi-khyab-pa, acintyavyavasthāna) に對して、離世間品では住不可思議、(nam-par-dgod-pa bsam-gyis mi khyab-pa) とし、名號品も亦漢藏共に同一に譯せられ、その原典の句は同一と思はれる。それは身不可思議を成立する義である。

第九德無所知障 (ges-dyahi sgrub-pa ni-mñah-ba) 覺解深密經では遊に於三世平等法性、(dus gsum la mñam-pa nid tshar phyin-pa, tyadhrasamatānryāta) に釋して、離世間品では遠に離三世、(dus gsum mñam-pa-nid las cin-tu-dyuiñ-ba) 名號品では等達、三世、(dus gsum mñam-pa-nid las cin-tu-dyuiñ-ba) とし、等同である。それは三世に於て無着・無礙の平等智性に到達せる義である。以上の四德は五經句を含むものであるが、第二分であるが、無上斷果による自利圓滿を顯はすものである。第十德流布身 (shugs-pahi-sku) 解深密經では其身流布一切世界、(hig-rten-gyi khams thams-cad du shugs-pahi sku dan-ldan-pa, sarvalokadhātuprasaktāya) に對して、離世間品では於一切世界、普現其身、(hig-rten

gyi khams thams-cad du cin-tu-khyab-pahi sku miñah-ba) とし、兩經は譯語の相違のみである。それは無量の衆生に對して義利を爲す意味である。それが四種として分別せられる。

第十一德利樂 (dgos-pa) 解深密經では於一切法智無疑滯、(chos thams-cad la the-tshom niéd-pahi mkh=yen-pa miñah-ba, sarvadharmāṇisaurīcayāñāna) に對して、離世間品では知一切法、(chos thams-cad la the-tsom mi miñah-pahi ye-ges-can) とし、藏譯によつて兩經等同である、ことを知る。それは一切の疑を斷する義である。

第十二德方便 (thabs) 解深密經では於一切行、成就大覺、(spyod-pa thams-cad ldan-pahi blo miñah-ba, sarvacaryāsamānvāgata buddhi) に對して、離世間品では具足成就一切妙行、(spyod-pa thams-cad dan-ldan-pahi dgon's-pa miñah-ba) とし、藏譯に依つて兩經は等同である。

それは觀史多天宮に生等を示現する義である。第十三德無雜染 (kun-nas-non-mois-pa med-pa) 於諸

法智₁無₂有₃疑惑₄ (chos ces-pa la nem-nur ni miah-ba, nihkankasadharmajāna) に對して、離世間品では永滅₁疑惑₂ (chos kyi ye-ces la nem-nur ni miah-ba) とし、藏譯を介して兩句の等しいことを知る。

それは諸の世間法を無始に於て各別に證る義である。

第十四徳自性 (no-bo-nid) 凡所現身不可分別 (nam-par-ma-brtags-pahi sku miah-ba, avikalpitacarita) に對して、離世間品では離₁虛妄身₂ (nam-par-ma-brtag-pahi sku dan ldan-pa) とあるが、これを亦、藏譯によつて兩經句の原典は等同であることを知る。

それは如來の身が煩惱の一切分別より生ぜざる義である。

以上の五徳は第三分に屬し、自行による他利圓滿の徳を説くものである。

第十五徳正受智、解深密經では一切菩薩正所求智 (byan-chub-semu-dpañ thams-cad kyi ye-ces yan-dag-par blañ-pa, sarvalodhisattvasaṃpraticchitajāna) に對して、離世間品では能與₁一切菩薩無量智慧₂ (byan-chub-semu-dpañ thams-cad kyi yan-dag-par-gnon-pahi ye-ces-can)

とあるが、兩經句は譯語の相違である。

それは菩薩の諸智を自然智 (rañ-hbyun gi ye-ces, sva-yambhūjāna 佛智の力) を正受する義である。

第十六徳自誓 (khas-len-pa)、解深密經では得佛無₁住₂勝彼岸₃ (sams-rygas hyi gnas-pa gnis-su-med-pa dam-pahi pha-rol-tu-byon-pa, advayabuddhāvihāraparamapāramigata) に對して、離世間品では住₁佛無₂二法₃究竟到₄彼岸₅ (sams-rygas kyi spyod-pa mi gnis-pahi pha-rol-tu-phyin-pahi pha-rol-tu-phyin-pahi mchog brtes-pa) とあるが、兩經句等同である。

それは菩薩が佛と成る法身と一となりて自誓する義である。

第十七徳成就 (gnub-pa) 解深密經では不₁相間雜₂如來解脫妙智究竟₃ (de-bshin-gcegs-pa ma hdes-pahi mam-par-thar-par mdsad-pahi ye-ces kyi mthar-phyin-pa, asaṃbhinnatathāgata vimokṣajñānamiḥāgata) に對して、離世間品では具₁足如來不可沮壞智慧法門₂ (de-bshin-gcegs-pahi nam-par-thar-pa tha-mi-dad-pahi ye-ces kyi mthar-phyin-pa) とあるが、兩經句は譯語の相違のせいである。

る。

それは如來の智果と斷果との無差別を成就する義である。

第十八德覺 (rloggs-pa) 覺の德には三句を含む。第一句は解深密經では證_二無_二中邊_一、佛地平等_二(mthah dan dbus med-phji sans-rygas kyi sa mñam-pa-nid thugs-su-chud-pa, anantamadyabuddhabhūmisamatādhigata) 二對_レて、離世間品では等如來諸地の經句が相應すべく、藏譯には、佛の中邊無を平等性を證す(sans-rygas kyi mthah dan dbus med-pahji mñam-pa nid thugs-su-chud-pa) 二あ_レつて正しく解深密經のそれと等同である。

第二句は解深密經では極_二於法界_一 (chos kyi dbyinis kyois klas-pa, dharmadhātuparyanta) 二對_レつて離世間品では〔究_レ究竟無量無邊〕虚空_一とあ_レつて、その藏譯に於ては藏譯解深密經の譯句と全同である。

第三句は解深密經では盡_二虚空性_一、窮_二未來際_一 (nam-mkhahi khamas kyi mthas gtugs-pa, akāradhatuparyavas ana) 二對_レつて、離世間品では究竟無量無邊虚空 (nam-mkhahi dbyinis kyi mthas gtugs-pa) 二あり、窮_二未來際_一、

の句を缺いてゐる。

この離世間品に於ては第十八德以後の經句は究竟無量無邊虚空法界等如來地と一聯と成つてゐるものを解深密經の經句と對應するためにその順序を變へたのであるが今、八十華嚴によつて並列するに

(一八) 具足如來平等解脫

(一九) 證_二無_二中邊佛平等地_一

(二〇) 盡_二於法界_一

(二一) 等虚空界

等とあ_レつて、その順序が相應すると同時に漢譯も亦等同である。

今、其等三句の中、第一句は雙句である眞如・法界を覺すといふ義である。それが法界を覺するよりして、第二句は法界を極むと説かれ、諸聲聞より殊勝なることを示すのである。聲聞は涅槃に於て法界を極むるのであるが、如來は第三句に於て、更に虚空界の邊に到りと顯示せらる。譬へば虚空は壞の時若しくは成の時に於ても盡くること無きが如く、諸佛世尊は現等覺の時若しくは涅槃の時に於て生死と涅槃とに住しないといふ義である。

以上、佛徳の經句を華嚴經名號品及び離世間品の佛徳の經句に對照し、それに各藏譯を媒介してその所依の經句の等なることを知ることが出來た。

華嚴經の此等二十一徳の一々の經句は如何に解釋すべきものであるか印度に於ける傳承がないので知ることは出來ないが、華嚴經の法相に隨つて解明しなくてはならない。瑜伽唯識教學にありては五釋を傳へるが、華嚴經より解深密經へ移植せられた構想の下に於ては無着疏の第一釋、即ち解説の第三釋が極めて親しいものであると考へる。

註① 八會

七 處

第一會	世間淨眼品以下	二品	摩訶陀國寂滅道場
第二會	如來名號品以下	六品	摩訶陀國寂滅道場
第三會	昇須彌頂品以下	六品	普光法堂坐蓮華上
第四會	昇夜摩天自在品以下	四品	夜摩天
第五會	昇兜率天寶殿品以下	二品	兜率天
第六會	十地品以下	一品	他化自在天
第七會	離世間	一品	摩訶陀國寂滅道場
第八會	入法界品	一品	普光法堂坐蓮華上
		一品	舍衛城重閣講堂

- ② 探玄記一七卷(大正・三五・四二〇上)
- ③ 拙著、佛地經論之研究、三九頁

④ Etienne Lamotte, *sandhinirmocana-sūtra*, p. 32. 翻譯名

義集、第十九項參照

⑤ 六十華嚴、離世間品(大正・九・六三一中)

⑥ 甘殊爾勘同目錄、第七六一番 XLIII. De-bshin-g-egs-pa

skye-ba-hbyun-ba bstan-pa. 142a⁴

⑦ 名號品(大正・九・九一八上)

⑧ 甘殊爾勘同目錄、第七六一番 XII. sans-rgyas kyri mshan

jin-tu-bstan-pa. 189b²

⑨ 第十一徳以下は名號品には無。

⑩ 探玄記卷四名號品には

「善覺智下釋_二智正覺世間殊勝_一於_二中十句文同_三攝論受用身二十一種殊勝功德中初十句_一如_二下第七會初_三二十一句總具。今依_二攝論及佛地論_三釋_二此十句_一」とありて注意するを見る。

第二節 住處圓滿の文の源流

次に、二利圓滿する世尊の住處は、古來、十八圓淨の淨土といはれるが、それは華嚴經十地品第十法雲地の説相の中に基いて構造せられてゐるやうである。智度論によれば、この法雲地は佛(地)の如し^①といはれるのであるから、その法雲地に依りてその佛果の位態が形成せられるであらうことは推測せられ得るであらう。

菩薩の第十法雲地の所説は世親菩薩造十地經論によれ

ば八分によつて大科せられる。その中、第三分は得受位と稱し、正しく佛智を攝する正住地の行が説かれるものであり、第四分は入大盡と名づけ、窮盡の最極なる地成滿の行が説示されてゐる。

今、其等二分の内容の科圖を示せば左の如くである。

法雲地(八)

第三得受位分(六)

- 一、隨^二何等座(一〇〇)
- 一、生相
- 二、量相
- 三、勝相
- 四、地相
- 五、因相
- 六、成相
- 七、第一義相
- 八、功德相
- 九、體相
- 一〇、莊嚴具足相

- 二、隨^二何等身量
- 三、隨^二何等眷屬
- 四、隨^二何等相
- 五、隨^二何等出處
- 六、隨^二所得位

四、入大盡分(五)

- 一、智大
- 二、解脫大
- 三、三昧大
- 四、陀羅尼大
- 五、神通大

今、此等の科による十地經の所説を解深密經の十八圓滿の佛土の經説と關聯・文絡して對比することゝしよう。

第一、解深密經十八圓滿の佛土の第十八依持圓滿(aya-satipanna)は佛陀の所依處を説くもので「無量功德衆所ニ莊嚴ニ大寶華王衆所ニ建立ニ大宮殿」とあつて、この經句の中心は大寶華王衆の句にあるのである。解深密經では最後に説かれるのであるが、華嚴經では第一生相として最初に置かれてゐる。即ち、經に「この〔一切智々

「受勝位の菩薩」三昧現在前する時、即ち大寶華王ありて出づ。」とある大寶華王に依つてゐるものであると考へる。この大寶華王について、眞諦譯攝大乘論釋卷一五(大正・三一・二六四上)には法界・眞如を譬へたものであるとすに對して、玄奘譯世親釋卷一〇(大正・三一・四四六中)には寶華所成説を取つてゐて、兩者異なる説を傳ふるは注意すべきものである。

第二、十八圓滿の第一顯色圓滿 (vara-saṅgama) は「最勝無曜七寶莊嚴、放大光明一普照一切無邊世界」とある。第一顯色圓滿より第十七門圓滿に至るものは第十八依持圓滿の形容句を爲すものであつて、總句に對する別句の關係に立つものである。十地經では第七第一義相として經に「無明普く一切の法界を照す。」といふに文相善く相應するものである。光明は淨土の第一義相であるべきであり、それが顯色として顯現相を取るものである。佛地の普光明 (samanā-prabhā) といはるゝのは、この第一義相としての徵表であらう。

第三、十八圓淨の第二形色圓滿 (samsthāna-saṅgama) は「無量方所妙飾間列」とある。これは十地經の第三勝相

として經に「一切の衆寶間錯して莊嚴す。」といふに對應する。

第四、第三分量圓滿 (pramāṇa-saṅgama) は「周圍無際其量難測」と説くは第二量相として經に「周圍は十阿僧祇の百千三千世界の如し。」と説くものと相應するものである。十阿僧祇の百千三千六千世界と説くは無量相に於て有量相として施設するものであらうから、周圍際りなしと説くも表現の異門であると見られるのであらう。

第五、第四方所圓滿 (dēśa-saṅgama) は「超て過三界所行之處」とあり、これは座所の第四地相、經に「一切世界の境界に過ぐ。」とあつて等同と見られる。

第六、第五因圓滿 (hetu-saṅgama) は「勝出世間善根所起」と説くに對して第五因相として經に「出世間の善根の生ずる所。」とあつて兩經全同であることを知る。

第七、第六自相圓滿 (svarūpa-saṅgama, ratī-bhīn-phuṃ-sum-tshogs-pa) は「最極自在淨識爲相」とあり、これは座所の第六成相として經に「諸法の如幻性の境界の成ずる所なり。」とあつて六相に於て相應しない如くで

ある。菩提流支譯深密解脫經には「善得_レ清淨自在解脫無礙之處」とあつてこれも亦契應せず、三經各々特殊の意義を具するのであらう。

淨土の成性が如幻性であるといふことは般若經及び華嚴經の思想である。如幻とは野馬 (marika、陽焰) 夢 (svapna) と共に喩說せられ、その法説は實際 (bhūta-koti) 空性 (śūnyata) 等と説かれる。それ故に淨土の如幻性とは空性・眞如・法界をいふものであつて、依持圓滿について眞諦の大寶華王を以て眞如・法界を寄顯する説と通ずるものである。

然るに解深密經に於ては、既に第一章に説くが如く、阿頼耶識の雜染と清淨とを説くを以て宗と爲すと見られるものであり、佛果は正しく轉依成滿せる位態である。その果位は轉識得智せる智果より外なく、淨土はその轉變であるから淨識相 (svayūdhāvīraṇī-taksana) としてのみの顯現である。玄奘譯世親攝大乘論釋には、
 最極自在淨識爲_レ相者謂佛淨土最極自在清淨心識以爲_レ體相、唯有識故、非_レ離識外別有寶等_上即淨心識如是變現似衆寶等、此句顯_三示果圓滿_一③

と解釋する。

第八、主圓滿 (adhīpati-saṃpanna) は「如來所_レ都」とし、深密解脫經にては「諸佛如來神力住持之處」とあり、十地經に於ては正しくそれを比定することは出来ない。然し、その淨土の主の住持の相を説くのであるから得受位分の第二隨_三何等身量經に「菩薩はその身殊妙にして華座に稱可す。」といふに對應せしめることが出来るか。

第九、第八輔翼圓滿 (paksā-saṃpanna) は「諸大菩薩衆所_三雲集_一」と説く。

第十、第九眷屬圓滿 (sevaka-saṃpanna) は「無量天龍人非人等常翼從」と説示する。

此等の第八・第九の兩經句は得受位分第三隨_三何等眷屬_一、經に「その時に大寶蓮華王の眷屬の蓮華の上に皆菩薩あり、一一の菩薩は皆蓮華座の上に坐して彼の菩薩を圍遶し、一一の菩薩は各十の十百千三昧を得て皆一心に恭敬して大菩薩を瞻仰せり。」と説くに相應する。十地經論に、何等の眷屬に隨ふとは、この坐處の大寶蓮華王座の眷屬と菩薩の眷屬はその中に住在すと釋してゐること④

によつて、大寶蓮華王座の眷屬とは輔翼を示し、菩薩の眷屬とは眷屬圓滿を顯はす意味であらう。十地經には其等を差別してゐないがそれを暗含するものに相違ないであらう。

第十一、第十受用圓滿(sambhoga-saṅgama, loṣṭya-od-pa phun-sum-tshogs-pa) 經に「廣大法味喜樂所_レ持」と説くが、十地經得受位分の第四隨_ニ何等相に「この菩薩は大寶蓮華王座に昇り、乃至皆一切諸佛の大會を見聞することを得との所説と相應するであらう。諸佛の大會を見聞すとは、その説法會座に集會して法味を任持する」とよりの外ないと考へる。

第十二、第十一所作成就圓滿(kṛtyānushāna-saṅgama) は「現作_ニ衆生一切義利」と説く。

第十三、第十二無災橫圓滿(anupāta-saṅgama, hṣhe-ba med-pa phun-sum-tshogs-pa) は「獨_ニ除一切煩惱纏垢」と説く。

第十四、第十三無怨圓滿(anprativādin-saṅgama, phy=ir-rgol-ba med-pa phun-sum-tshogs-pa) は「遠_ニ離衆魔」と説く。

此等の三圓滿は得受位分第五隨_ニ何等出處に依ると考へられる。何等の出處に隨ふとは、十處より光明を出すことであつて、その光明の業用は利益業・發覺業・攝伏業の三種に分類せられる。

十種の光明の中、第八光は初發心より九地に至る菩薩を發覺し、第九光は十地の菩薩、第十光は一切の諸佛を發覺すといはるゝが、これが、所作成就圓滿と相應するであらう。

又、初五光は凡夫の苦惱を滅除し、次の二光は二乘を照益し、後の二光は菩薩を普照すといはれるが、それは無災橫圓滿と對應することは疑ふことは出来ない。

復、第八・第九の二光は攝伏業といはれ、第八光は能く攝して九地以前の菩薩をして來つて供養を成ぜしめ、第九光は能く一切の魔宮を隱蔽すると説くのである。これが無怨圓滿と相應することは明かであらう。

第十五、第十四住處圓滿(gnas phun-sum-tshogs-pa) は「過_ニ諸莊嚴・如來莊嚴之所依處」と説く。得受位分隨_ニ何等座の第八功德相と相應する。經に「一切の諸天の所有境界に過ぐ。」とあるものと意趣等同である。

第十六、第十五住處差別圓滿 (bdaḡ-paṇi gnaḡ kyī bye-brag phun-sum-tshogs-pa) は「大念慧行以爲遊路」と説く。

第十七、第十六乘圓滿 (yāha-saṅganna) は「大止妙觀以爲所乘」と示す。

第十八、第十七門圓滿 (dvāra-saṅganna) は「大空無相無願解脫爲所入門」と説いてゐる。

右、此等の三圓滿は入大盡分たる地成滿の行である智大・解脫大・三昧大・陀羅尼大・神通大の五大の中、路圓滿は智大、乘・門の圓滿は解脫・三昧等の大によつて取意した如く思はれるのである。

以上説くことによつて、解深密經序品の十八圓淨の佛土の構造は十地經法雲地の第三得受位分・第四入大盡分等を源流とするものであると想定し得ることでないであらうか。この構想を原型とし、更に華嚴經如來性起品等の普光佛地の思想によりて琢磨せられ、以て淨土の定型として建立されたものであらう。

因に、この十八圓滿の淨土の相が無着菩薩造攝大乘論^⑤の中に説かれてゐることは既に周知の如くであつて、そ

こには、解深密經を擧示することなく、「如百千偈修多羅菩薩藏緣起中」と指適するのである。その百千偈修多羅といふについて、眞諦の釋論には、

論曰、如言百千經菩薩藏緣起中說、釋曰、總舉諸經故、稱如言。菩薩藏中有別淨土經、經有二百千偈故名百千經。又華嚴經有二百千偈、故名百千經。於此經緣起中、廣說淨土相。

とあるが、その釋意は、十八圓滿の淨土の相狀は、一、諸經に説かれ、二、別の淨土經の百千經にあり、三、華嚴經の中にも説かれてゐるといふのである。

こゝに解深密經を擧示してゐないのは、無着時代に現存する序品の有する解深密經の成立してゐない證であると主張する學者もあるのであるが、既に十地經は龍樹時代に成立し、その法雲地を基本としての佛地が菩薩地に對して構想せられる充分の時代を經過してゐる。従つて、諸經に説かれ、或は別の淨土經に説かれてあつたことは容認してよい。而して解深密經が擧げられないのは、何か意趣があるのかもしれない。

尙、この百千經について、釋論の記述の如く華嚴經で

あるといふを躊躇する人々もあるが、華嚴經の各品の縁起の中には十八圓淨を内容とす如き華藏世界を説示するのであるから「廣説淨土相」といふに相應するものでないであらうか。

註① 智度論卷五〇(大正・二五・四一九中)

② 國譯、十地經論卷一二(國譯大藏經、論部五一・三八五頁)

③ 玄奘譯世親攝大乘論釋卷十(大正・三一・四四六上) 眞諦譯攝大乘論釋

最清淨自在唯識爲相、釋曰菩薩及如來唯識智、無相無功用故言清淨、離一切障、無退失故言自在、此唯識智爲淨土體、故、不_レ以_レ苦諦爲體此句明「果圓淨」(大正・三一・二六三中)

④ 國譯十地經論卷一二、三八六頁

⑤ 佐々木月樵著、漢譯四本對照攝大乘論四七頁

⑥ 眞諦譯攝大乘論釋、卷一五(大正・三一・二六三上)

第三節 聲聞德圓滿の文の所依

次に、無量の大聲聞衆と俱なりとして、以下眷屬を擧ぐる中、聲聞の德を説く經句の所依について檢尋しよう。

それは、「一切調順」等と説かれるのであるが、華嚴經入法界品等に聲聞の十徳として擧ぐるものと殊異して、

般若經所説のそれと相應するもの、如くである。其等の諸徳經句を全句に互りて調査し得たのではないが、究明し得たものについて述べよう。

先づ、「一切調順」と説く。無着の疏によれば、この句が聲聞の徳の總句であり、遺餘は別句である。その別句は十三徳を顯はすのであるが、無着疏の徳名に隨ひ、經句の所依と意義とを究めよう。

その調順の所依であるが、般若經序品に説く阿羅漢の徳について、(一)諸漏已盡、(二)無復煩惱、(三)心得好解脱、慧得_レ好解脱、(四)心調柔、柔軟摩訶那伽、(五)所作已辦、(六)棄擔能擔、(七)遠_レ得已利、(八)盡_レ諸有結、(九)正智已得_レ解脱_レ等と説示してゐるが、その第四句と相應する如くである。

諸の有學は違逆なきが爲に粗硬無く、調順せる馬の如しといふ義である。測疏卷一には佛地經論及び智度論卷三等によつて義を釋してゐる。

第一徳、無二圓滿、「皆是佛子」と説く。解説には、聲聞が佛口なる阿含力より生ずること菩薩と差別無きより無二圓滿といふと釋してゐる。その佛口より生じ、法よ

り生ずるより佛子といはるゝは阿含經以來説くことであるが、般若經勸學品に舍利弗が須菩提を讚歎する中に、
汝眞是佛子、從佛口生、從見法生、從法化生、取法分
不取財分、法中自信身得證^④。

とあることが注意せられ、それが聲聞の一徳として施設せられたものである。圓測その疏中、智度論卷四一（大正・二五・三六三中）に佛子を釋すと指示してゐる。

第二徳、善調順圓滿、「心善解脫、慧能解脫」の經句であるが、心は善く解脫しとは、三界の渴愛分の一切の雜染法より解脫することであり、慧は善く解脫しとは、三界の無明分の一切の雜染法より解脫することである。般若經九徳句の中の第三徳句と同一である。

第三徳、讚圓滿、「戒善清淨」とは、六支を具足することであつて、一、戒と相應して住し、二、別解脫律儀によつて防守し、三、軌則の具足、四、所行の具足、五、微細罪に於て怖畏を見る、六、諸の學處を受學することである。聲聞の共許の徳を擧示したものであらう。

第四徳、廣深圓滿、「趣求法樂」、それは自己が法を求むるが爲に善友と會合する時、事を好む意樂無く、惡威

儀を捨離することによつて善友と安樂に集會し、これによつて功德が廣深となるといふ義である。これも亦聲聞共許の徳を列擧したものであらう。

第五徳、廣大因圓滿、「多聞聞持、其聞積聚」、それは三藏について、多聞と聞持と聞積聚とによつて慧が廣大となるより言はれ、種々の經典に「初中後分皆能聽受」とあるによつたものと思はれる。聲聞の徳として應しきものである。

第六徳、隨順道を行くが故に行くこと圓滿「善思所思、善說所說、善作所作」、それは聖者が善思所思等の身口意の三業によつて盛榮（天上に生れること）と至善（涅槃を證すること）の道と隨順して行くが故に名づけられる。測疏は瑜伽論卷二五（大正・三〇・四二三上）に聰慧者の相として説いてゐることを指示する。これも亦聲聞共許の徳を擧示したものであらう。

第七徳、捷圓滿、「捷慧・速慧・利慧・出慧・勝決擇慧・大慧・廣慧及無等慧、慧質成就」、この經句について、測疏に大品經及び智度論卷八三（大正・二五・六四一上中）の十慧を相應せしめてゐるが左の如くである。

善知_レ慧、善知_レ疾慧、善有_レ力慧、善知_レ利慧、善知_レ出
 慧、善知_レ達慧、善知_レ廣慧、善知_レ深慧、善知_レ大慧、
 善知_レ無等慧、善知_レ貴〔寶〕慧^⑤

疾慧以下十慧を數へ、解深密經の速慧は般若經の力慧と相應するのであるが慧寶を寶慧と見るも九慧に過ぎない。測疏も注意するが如く、一本に甚深妙慧ありといはれ、般若經の深慧であるが、その一本とは藏傳解深密經の如き一本を指すものか藏譯に於ては十慧である。一句の脱落かとも思はれるのであるが、それは傳承の相違であることを注意しなくてはならない。

般若經の十慧と解深密經の十慧とは密接なる關係ありと思はるゝのであるが、般若經に於ては菩薩の十慧としてゐる。

此等の十慧を具足することによつて捷神通があるから捷圓滿といはるゝのである。

第八德、遠行圓滿、「具足三明」、宿命・天眼・漏盡の三明は大阿羅漢及び大辟支佛の具足する所であるとするは常に説くものであるから、以て一德としたものと想定せられ、かゝる三明は前際と後際及び有漏と無漏との

一切法の涯底に達するから遠行圓滿といふのである。

第九德、賢行圓滿「遠_レ得一切現法樂住」、四靜慮と滅盡定とを得るは、現在に於て樂住の專一行であるから賢行圓滿といはれ、それは阿羅漢の共許の德として常に説く所より一德としたものであらう。

第十德、勝淨圓滿、「大淨福田」、阿羅漢は第一眞實福田であり、又四雙八輩の聲聞僧が世間無上福田であるのであるから、般若經等に八念が説かれるのである。

阿羅漢等に布施等を行じて速なる果があるのは三界の煩惱を永く離れて淨田となつてゐるから勝淨圓滿といはれるのである。

第十一德、寂靜圓滿、「威儀寂靜無_レ不圓滿」それは行・住・坐・臥等一切の威儀を知るが如く行じ、その威儀は寂靜と相應するよりいはれる。聲聞の德として極めて應しい一德である。

第十二德、和會樂圓滿、「大忍柔和成就無滅」、瑜伽論卷九二に、忍辱とは、他怨に於て終に返報することなきこと、柔和とは、心に憤性なくして他人を惱まさざることをいふと解説する。かゝる相は親近すべく應しいので

和會樂圓滿といふのである。これは聰慧者なる諸聲聞の具足成就の相の一である。

第十三徳、自在圓滿、「已善奉行如來聖教」戒學等を成滿ならしめんが爲に如來の教を違逆なく行じ、以て如來の教に悟入するのである。かくの如く如來の教に悟入することによつて煩惱は自在を得ず、戒學等に於て輕安に行することが出来る。それより自在圓滿といはれる。

以上によつて知らるゝが如く、聲聞の十三徳句については、般若經會座の列衆である聲聞の徳の中、第四徳句を總徳とし、それに諸徳を別徳として並舉し、更に聲聞共許の徳として應しいものを附加し、以て解深密經構想の下に組織したと見ることが出来ないであらうか。

註① 華嚴經入法界品

- (一) 悉覺眞諦 (二) 證如實際 (三) 深入法性 (四) 離生死海 (五) 安住如來虛空境界 (六) 離結使縛 (七) 不著一切 (八) 遊行虛空 (九) 於諸佛所疑惑悉滅 (一〇) 深入信向諸佛大海 (大正・九・六七六下)
- ② 摩訶般若波羅蜜經序品 (大正・八・二一七上)
- ③ 解深密經疏卷一 (續藏・三四・四・三一七右)
- ④ 般若經勤學品第八 (大正・八・二三四上)
- ⑤ 摩訶般若波羅蜜經卷二一 (大正・八・三七二下—三七三)

上、尙瑜伽論卷八三大正・三〇・七六一上には種々の慧を擧げてゐるが、その中十慧は解深密經のそれと相應してゐる。

- ⑥ 智度論卷二 (大正・二五・七一下)
- ⑦ 瑜伽論卷九二 (大正・三〇・八二六下)
- ⑧ 智度論卷二一 (大正・二五・二一九上)
- ⑨ 瑜伽論卷九二 (大正・三〇・八二五中)
- ⑩ 右同 卷二五 (大正・二五・四二一中)

第四節 菩薩徳圓滿の文の所依

序品の終りに於て、「復有無量菩薩摩訶薩衆、從種種佛土而來集會」として、以下、十經句を以て菩薩大士の大なる徳を讚説してゐる。この十經句を解釋するについて、佛地經論には、十大—徳大九句と業大一句との十句—及び十地を以て解釋し、又、十度、十願等を以ても亦釋し得ると四の復次をもつてする。藏傳無着疏に於ては、菩薩道の過失を遠離して、正に大乘に悟入することを説く十大正入の徳とし、標・釋の關係にて解釋する。

此等の釋の中、何れを以て經の原意に近いものであるかは遽に斷定することは出来ないが、十地・十度・十願等に配釋することは、餘りに型に入れ過ぎるやうに思は

れる。無着疏の十大正入の釋は佛地經論の十大釋と相應するし、一應それに據つて徳名を擧げ、解説によつて意義を知り、其等經句の所依を尋ねよう。

菩薩の十徳句が十大等全て十の字を以て解釋せられると相傳する如く、それが華嚴經系經典の説述の方規に隨つてゐるのであるから此等菩薩の徳句が華嚴經に基くと想像せられる。十大正入の徳は大乗に正しく悟入する菩薩道の行を説くのであり、華嚴經の中、離世間品は普賢の二千行を廣説するのであるからそこに源流を見究めることは自然であらう。離世間品は普慧菩薩が普賢菩薩に對して「唯爲解説諸菩薩行、從_レ始至_レ終、令_レ無_レ疑^①」と請ひ、二百問を以てし、普賢菩薩は一間を十門分別し、總じて二千の行法を説くものである。探玄にては、前引の度世經の文によつて、その二千の普賢行法の中、初二十句は十信行、次二十句は十住行、次三十句は十修行、次二十九句は十廻向行、次五十句は十地證行、次五十一句は因圓果滿究竟位中行であるとし、六位を以て説くのが古來の相傳であるとしてゐるが、かゝる六位の分別は大經成立後に於ける思想に據るであらう。今は、「從_レ始

至_レ終」とは「あらゆる一切」の意味に解して、そこに説かれる行法の中に本經の十大正入の菩薩行の徳句の源流を尋求して見よう。

第一徳、大乘正入の徳、「住_ニ大乘_ニ玄奘譯、住一切所求大處流支譯、*gnas chen-po la gnas-yin yan-tag-par-shugs-pa, mahāvihārena sthitasamprasthita*」とあるが、その中、藏譯の *gnas-yin* の語は無着疏及び解説には無いので、經句に多少の増減が見られるやうである。玄奘の「大乘」と譯するのは意譯であらう。今、無着疏によれば「大處に悟入し」と讀まれ、道の九過失を遠離する解釋より言へば、その大處 (*mahāvihāra*) とは大入 (*mahāpraveca*) の義とせられる。一菩薩位について、入と住と出とがあり、大處とは住位、大入とは入位と考へられる。大入とは大乘道の自性であるといはるゝから玄奘譯はこの意味に於て義譯したものに相違ない。

佛地經論卷二の十大釋の第一は精進大を顯はすものとし、「皆住_ニ大乘_ニ由_ニ精進力_ニ安_ニ住_ニ大乘_ニ、拔_ニ濟有情_ニ令_レ離_ニ生死_ニ、反自發_ニ趣_ニ無上菩薩_ニ」と解釋するのであるが、それは離世間品の集會する菩薩が「悉是一生、當_レ成_ニ阿耨多

羅三藐三菩提^⑥と總じてその徳を擧ぐるに據るものと云ふことが出来るであらう。この無上菩提に發趣するより外、大處・大入はないのであるから、大乘に住す、或は大處に悟入すと説かれるのである。

第二正菩提と順ぜざる道行を遠離して悟入する徳、

「遊^⑦大乘法^⑧ theg-pa chen-pohi chos kyiis nes-par-byuniba, mahāyānadharmamityāta」と説き、十大釋にては、第二因大を顯はすものとして、「即十地等、以^⑨聞思修等、漸次而遊」とし、大入釋に、第一地の順ぜざる分は異生乃至第十地の順ぜざる分は法に自在を得ざること、及び布施波羅蜜の順ぜざる分は慳、乃至智慧波羅蜜の順ぜざる分は無明等である。この道の過失を遠離して大乘法なる地と波羅蜜とに隨入する義であると説き、兩釋義の相は等しい。第一標徳の物體を出したものである。深密解脫經では「畢竟能取^⑩無上大法」(大正・一六・六六五下)といふよりして離世間品の「悉能受^⑪持諸佛正法」(大正・九・六三一下)といふ普正法徳行と契應すべきか。

第三有塵の道行を遠離して悟入する徳、「於^⑫諸衆生、其心平等、sems-can thams-cad la sems nñam-pa, sarva=

sattva samacita」それは應起の小心、即ち、瞋恚を除く慈・害意を除く悲・不喜を除く喜・貪欲を除く捨・疑心を除く我慢消除・有相を除く無相等によつて平等心と相應することである。この悟入の相は菩薩の治地業の第二として、「二者於^⑬一切衆生中等心衆生不可得故^⑭」と般若經にも説いてゐる所であるが、普賢行の第三十八は菩薩大士に十種の平等心あることを説き、その第三は「於^⑮一切衆生平等心」(大正・九・六三六下)とあつて大乘教共許の説である。

第四有刺の道を遠離して正入する徳、「離^⑯諸分別及分別、種々分別^⑰玄奘譯、離^⑱諸一切分別分別^⑲流支譯」

この經句について、解説にはその解釋に三説あり、次の如く藏譯されてゐる。

(一) bskal-pa dan bskal-pa-ma-yin-pahi yon-s-su-rtog-pathams-cad dan bral-ba (劫と非劫との一切の分別より離れ)

(二) rtog-pa dan nram-par-rtog-pa dan yon-s-su-rtog-pa thams-cad dan bral-ba ((自性)分別と(差別)分別との一切の分別より離れ)

(三) bskal-pa dan bskal-pa-ma-yin-par yois-su-rtog-pa thams-cad dan brah-ba (劫と非劫とに於ける〔分別 (yois-su-rtog-pa) 及び自性と差別とに於ける分別 (yois-su-rtog-pa)〕一切の分別より離れ)

此等の中、藏傳解深密經は第三譯である。無着疏の解深密經序品引用に於ては第二譯であるが、道の九過を遠離する解釋よりは第三譯であるべきものゝ如くである。

ラモート (Etienne Lamotte) はその著「sarva-kalpa-vikalpaparikalpa-vigata」と梵文に還源する如く、kalpa は劫波と分別との二義を有するから三種の藏譯が成立する。彼は藏譯解深密經本文を校訂するに當り無着疏を以て訂正してゐるが、それは妥當を缺くやうである。何故なれば、其等の藏譯者は傳承ある解釋に基いて譯してゐると見らるゝからである。佛教經典に於ける校合に當りては充分注意すべきものである。

今、此等の思想は普賢行第六十八の十種の發無懈怠心中殊に第十に相應するであらう。

即ち、

菩薩摩訶薩、作_レ如是念、於_レ一念中三世一切佛一切

佛法一切衆生一切刹一切世界一切空界一切法界一切施

設語界一切寂滅涅槃界、如是一切諸法以_レ一念相應慧、悉別相覺知、明了修分別修知智斷證、於_レ一切法、不_レ取_レ虛妄、無_レ一_レ無_レ異_レ無_レ所_レ分別、無_レ所_レ修習、無_レ境界、無_レ所有、無_レ二_レ智_レ慧覺、一切二_レ無_レ相_レ智慧覺、一切相、無_レ劫智、慧覺、一切劫、……一切智自在神變、教_レ化_レ成熟一切衆生、發_レ無_レ懈怠心 (大正・九・六四二中)

とあつて、諸法の一・異の分別と念・劫の分別とを離れて衆生を成熟する無懈怠心の行を説いてゐる。十大釋に於ては第四時大であつて、「即於_レ一切時、猶如一念平等而轉……以_レ不_レ分_レ別劫與非劫、故能長時修行無_レ厭」と釋し、無懈怠心の經説と契應する。

徳名の有刺の道とは有分別心であり、それは虚妄の根本であるから惡魔の刺といはるゝのである。

第五失壞の道行を遠離して正入する徳、「摧_レ伏一切衆魔怨敵、bdud dan phyir-gol-ba thams-cad boom-pa sar= vamaraprativādinantana」その失壞の道行とは憂惑の心であつて、身體の資具及び所攝受の物等に執心することであるが、十大釋にては、無染大を顯はすとし、「以_レ捨_レ

一切所攝受_二故能伏_二魔怨_一如說菩薩若於一切所攝受事_一知不_二堅實_一心不_二貪求_一即能摧_二伏一切魔怨_一と説き釋相一致する。普賢行第百五十七は十種の淨精進を説き、第七は降伏一切衆魔怨敵淨精進といひ、「悉能除_二滅貪患_一・愚癡・煩惱・邪見・諸纏障蓋_一故」(大正・九・六六〇中)と説示する。無染大の意義の源流をこゝに見出し得るであらう。

第六有壞の道行を遠離して正入する徳、「遠_二離一切聲聞獨覺所有作意_一 nan-thos dan ran-sans-rygas kyri yid-la-byed-pa thams-cad las rin-du-gyur-pa, sarvaçrāvaka-pratyekabuddhamanasikāra-durasthita」その有懷の道とは、大道を思惟せざる衰滅の心即ち聲聞と獨覺の作意心であるが、今はそれより遠離することである。十大釋では作意大とし、「遠分斷_二除一切二乗作意_一」(大正・二六・三〇〇中)と解釋する。普賢行第百二十は佛法退失の遠離について十種あることを説いてゐるが、その第九には、「樂_二求聲聞及緣覺乘_一失_二佛法道_一應_二當遠離_一」(大正・九・六五四下)とあつて、經句相ひ相屬すといふことが出来るであらう。

第七無樂の道行を遠離して正入する徳、「廣大法味喜樂所持、chos kyri roñi dgah-ba dan bde-ba chen-pos brtan-pa, mahādharmarasaaprīṣukhaṣṭhira」その無樂の道行とは大乘の法味の喜と樂とを忘失して受けざる心、即ち現觀道を得ざる心であるが、今はそれを遠離するのである。十大釋にては任持大と名づく。離世間品に、菩薩の自分徳を顯はず中、「三世一切諸佛所說句味及義、善聞受持廣爲人説」(大正・九・六三二中)と説くものと關聯せしめることが出来る。

第八有畏の道行を遠離して正入する徳、「超_二五怖畏_一 higs-pa chen-po lha las yai-dag-par-'das-pa, pañcama-hābhayasamarānta」その有畏の道とは、五怖畏の超過せざる異生の世間心である。今は身・口・意の三種の清淨業と清淨増上意樂との位に於て五怖畏の因を隨見して超過するのである。十大釋に於ては清淨大と名づけ、兩論の釋相は大體等同である。普賢行第四十二は十種の大正希望を説き、その第五に、

菩薩摩訶薩、發_二如是心_一、我當_二正_一向_二菩提_一離_二一切畏_一所謂不活畏・惡名畏・死畏・惡道畏・大眾畏如是等畏

我當_レ遠離休息除滅_レ一切衆魔外道不能_レ壞_レ我_レ得_レ大正希望_レ(大正・九・六三七上)

とあり、不活畏等の五畏は即ち五怖畏である。この經句を以て據處とすることが出来るであらう。

第九無種性の道行を遠離して正入する徳、「一向趣_レ入不退轉地」(phyir-mi-dlog-pahi bgröd-pa scig-par-gyur-pa, avairatikabhūnyekayānika)その無種性の道行とは、無相に住し、無に住する無加行無功用の道と種性とに相應ぜざる心であつて七地の菩薩の有加行に轉ずる心である。今はそれを遠離して不退地に於て一向と成れる菩薩と成ることである。十大釋にては證得大といはれ、その釋又これと等同である。普賢行第四百四十八は菩薩の十種住を擧げ、その第八無相住に「離_レ生受_レ證不退轉故」(大正・九・六五九上)と説いてゐるが、本經と相應せしめることが出来る。

第十無對治の道行を遠離して正入する徳、「息諸衆生一切苦惱所逼迫地而現在前、sems-can thams-cad kyi gnod-pa thams-cad rab-tu-shi-bar-byed-paḥi sa miñon-du-gyur-pa, sarvasatva-sarvopadrava-praṇāmana-bhūnyabhīmu-

ḥa)その無對治の道とは、生死と涅槃とに住せざる道に於て對治無き心であり、衆生の待ちつゝあるに涅槃を現前する心である。これを遠離して、大慈と大悲とにより、一切衆生の内外の苦惱を寂靜ならしむるのである。十大釋にては業大と名づけ、その義又これと同じい。普賢行第四百四十六に十種の坐を説いてゐるが、その第八は大慈坐とて「令_レ惡心衆生悉歡喜_レ故」(大正・九・六五八下)と説き、第九は大慈坐とて「能忍_レ一切諸苦惱_レ故」と述べてゐる。本徳句は此等の經句と連關せしめ得るであらう。

以上、菩薩讚歎の徳句を華嚴經離世間品の普賢行の説相と相應せしめて考察したのである。これによつて、二千の普賢行を大乘正入の立場より選擇して直に十徳句を構想したと極言するのではないが、淵源として親縁關係にありと觀ることは許されるであらう。

註① 度世經卷一(大正・一〇・六一八上)

② 探玄記卷一七(大正・三五・四二一中)

③ この徳名は無着疏に名づけてゐない。總標の徳句であるので假りにこの名を與へたものである。

④ 拙著、佛地經論之研究六四頁參照。

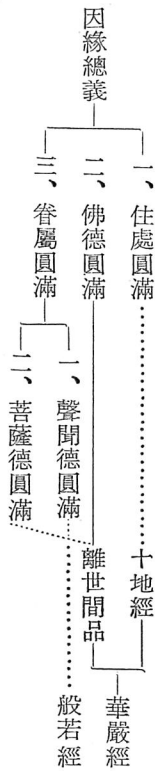
⑤ 佛地經論卷二(大正・二六・三〇〇中)

- ⑥ 華嚴經離世間品(大正・九・六三一中)
- ⑦ 智度論卷四九(大正・二五・四一〇上)

第五節 序分の成立構造について

上來、解深密經序品の經句について、その成立素材の基く所を論究したのであるが、佛の住處である十八圓淨を説く經句は十地經に基本的構想を得、佛德讚歎の二十一句は名號品及び離世間品の佛德の經句を襲用し、菩薩讚歎の十德句は離世間品普賢行に源流を仰ぎ、聲聞讚歎の十三德句は般若經の聲聞の德句を根基としたものであらうといふことである。

今、それを圖示すれば左の如くである。



此等の住處・佛德・眷屬の三圓滿の經句に於て、構想の原型が、或は全句が、或は數句が華嚴經及び般若經より移植せられたことは事實ではあるが、解深密經として構造せられるに及んで、第一章に示すが如き宗によつて變容を受け、以て體系・組織してゐるものであることも見逃すことは出来ない。